
黒歴史ノートより愛をこめて

左藤鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒歴史ノートより愛をこめて

【Nコード】

N3921Y

【作者名】

左藤鈴木

【あらすじ】

ネタは思いつくけど、それを話数のある文章にできない。妄想をするのは好きだけど、それを形にするのはめんどくさい。

せっかく思いついた良さげなネタなのに死蔵するのも気が引ける・
・
ネタを書くだけだけなら俺ってば負けないんだぜ！

こんな設定ならこんな展開に・・・クククツ・・・って妄想させてやる！

黒歴史ノートを読み返そうとしても、あまりの恥ずかしさになかなか読み進まない僕の送る現在進行形私的黒歴史戦慄厳選短編未満小
噺集！やめろ、手が勝手に！

恥ずかしい ワタシ を もっと 見て ！

ISに乗れない女子の話（前書き）

このほかには、ゼロ魔にパチエを突っ込んだやつとか、ホワイトス
ネイクのスタンドを持った型月の封印指定執行者とか、殴りメデイ
のVRMMO閉じ込められ系とかストックがあるよ！

ISに乗れない女子の話

IS - 世界で唯一ISに乗れない女性 -

いちわめ！

「世界で唯一ISに乗れる男」と言えば織斑一夏が有名であるが、「世界で唯一ISに乗れない女」と言えば桐生水守である。ISに乗れない女性と分かったということは、普段からISを身近に置く立場の者であるだろうなと予想できるが、彼女はIS開発メーカーの社長であった。研究者でもある彼女は、第三世代型ISの開発に伴い自らが専攻していたイメージ・インターフェイスと脳の基礎と応用の技術で持っていた一つの会社を立ち上げた。まあ、言わずもがなアジア圏有数の企業グループの桐生財閥が嫡子であった彼女は、両親からの資出だよりに起業したのであった。しかしその実力は今や昨今のIS業界にとっては欠かせないものとなるまでに成長していた。

そんな彼女であったから、開業直後にIS適性が全くないと分かったこと自体はあまり問題ではなかった。

しかし、世の中はこの情報に混乱した。今や分け隔てなく世間にはこびつている女尊男卑の根本は女性がISを使うことにある。ここに来てISが使えないこともあるだなんてわかつてはその優位性が失われてしまう、これにより一時的に全世界は大パニックとなった。桐生社に殺到する抗議・質問・罵倒や称賛の問い合わせは男女から平等に分け隔てなく殺到。居間のニュースの話題を独占し、一時は桐生に対しての不買運動すらおこったがあの桐生社がその程度でダメージを受けるはずはなかつしか暴動は治まっていた。未

期には、原因を探るための水守社長への精密検査も終わり、原因が「ごく一部の人間に発生する遺伝子的な不適合」でありかつ「発生する確率は1000万人に一人」という奇跡的な確率もあって、いつの間にかこのニュースは情報の渦へと消えていった。この事件により全世界の人々は、「桐生水守」と”one to one's works”の名前を叩きつけられたのだった。

久我直美という人物がいる。バイク、自動車、レーシングカーから始まり、果ては戦闘機まで乗りこなす生まれつきのテストドライバーである。生来のスピード狂の最速主義者であった彼女は同じくらいか、それ以上に突飛な行動の多い桐生水守の幼馴染であり腐れ縁である。最速を目指すために最新鋭の乗り物を取り回している彼女はがISという最速への可能性を見逃すはずもなく、個人的な縁もあって桐生水守の会社所属のIS乗りとなった。ISが乗れないうえに第きぢょうの社長であると、狙われる理由に事欠かない水守であったので、ボディガードは必須。ならばと水入らずのなかであった久我に専用機を渡し、同時に久我をボディガードに拝命。以降二人は付かず離れずの関係となった。

水守の元から久我が離れたのは今日まで数えてたつたの二回だけであった。一度目は久我の単独行動で、二度目は水守の独断のせいであった。そこにはいずれも織斑一夏が関わっていた。

「おいおい、大事な決勝戦を抜け出してまでどこ行くつもりだ、織斑千冬？」

脚部を覆うドピンクのISをつけた久我が言う。腕を組んでの仁王立ち、しかしここは空中である。派手なブーツでも履いているのかという程度の軽装である彼女のISは飛ぶというよりも立つといったほうがいい気軽さと安定感で空にいた。おそらくそれが彼女の単一使用能力なのだろう。

織斑千冬のはるか後方、しかし彼女にとっては無いに等しいその距離で久我が話しかけた。

それに対し千冬は立ち止り一瞥をくれただけであった。決勝戦の相手。最速のIS。しかしそれにかまっている暇は、今は無い。私は早く行きたいのだ、との思いが態度に出ていた。

「おいおい、私がミノリと別れてまで時間作ってやってんだ。その態度は無いんじゃないの？」

大事な大事な弟君が誘拐されちてちゃあ、しょうがないとは思っているぞ。」

久我がそう言い終わるか否か。織斑千冬は振り向きざまに久我に対して剣を抜いた。瞬時加速からの逆袈裟切り、避ける暇などないくらいの高速度。手ごたえを確信しなげそのことを知っているのかどう尋問すよつと考えはじめるとも驚愕によつてそれは打ち切られた。ありえない手応えのなさ、そこに久我がいなかったのである。

「おうおうおうおう、いきなりだねえ。いきなりやってくれるねえ。いいじゃんかそついうの、遊ぼつぜ？」

千冬のもう後ろから声がかかる。同時に飛んでくる衝撃、いや後から放ったはずなのに彼女のハイキックのほうに僅かに速い。なんとか

体制を整えながら辛くもそれを受ける千冬であったが、その心は暗い。

会話の時間を設けたいのかご丁寧に久我は自分の刀との鏝ぜりに答えている、千冬は考える。おそらく千冬が決勝に棄権することを察したのであるが、そしてこう考えたのであろう

「あたしは、織斑、あんたとヤツてみたいんだ。」

その精神には敬意を表したいし、その実力も申し分ない。がしかし今の千冬には、弟を誘拐された自分には、時間がない。あまりにも足りない。

「それに、じゃないと会えないぜ？ 弟君にはよ？」

その瞬間、千冬表情が変わった。目は見開かれ、葉を噛み縛っているのがきつく結ばれた口の上からでもわかる。

迂闊であった、不注意であった。はじめのセリフでわかる、一夏がさらわれた事を知っている。それにこの場所はモンドグロツソの開催場からかなり遠い海洋上である。久我は目的と行き先を分かっている千冬を追っていたのである。つまり

「弟君は私たちが預かっている。」

瞬時加速、その瞬間に急激に千冬に圧がかかる。ISの守りをもつてしても身体操作すらままならないGである。

「ッ……!!」

急激に後ろに飛ばされる千冬、ただ飛ばされているだけでシールドエネルギーが減っていくのがわかる。

「うおおおおお！！！！」
無理矢理に腕をふるい、零落白夜によって周囲を切り刻む。
糸であった。千冬の周りには鋼糸が絡みつき、バカでかいブースターと繋がっていた。ひたすらにそれを切り刻む。

「あたしのISはラディカル・グッドスピード！なんでも速くすることができまーす！」

自己紹介ですとばかりに繰り返された技とセリフによって、千冬はキレた。全体を見渡す観の目で久我を見る。ただ全体を覆うような古スキンドで流線型の機体が目に入った。ハイパーセンサーに映る久我の打ち出した高速の弾丸の中へと飛び込む。自らの機体に当たるものだけをその刃で破壊しつつ久我へと攻撃を仕掛けた。久我に対して自分は速さが足りない、千冬はそう自覚していた。始めの奇襲は手抜かったとはいえかなりトップスピードに近いものだった。それをまるで余裕によけ切られたのである、現実問題として千冬は彼女に追いつけないだろう。

だからこそ攻める。今の攻撃で久我は遠距離攻撃もできると分かったが、それでは速さとともに攻められると一方的にいたぶられてしまう。
ゆえに近づく。接近戦であれば、こちらに当たらないと当てれない。向こうが攻撃するということは、つまり向こうからやってくるということである。そこを討つ、一撃でのダメージが大きな千冬になら、まだ挽回のチャンスはある！

「衝撃の」

久我の機体は、かつて彼女の好きだったテレビ番組からのオマージュでできている。そのぶん思い入れは一塩であるし、羨望、憧憬、

目標意識は自ずと高まる。

「ファースト・ブリット! ! ! ! !」

「零落白夜! 迎え撃つ! ! !」

重なる斬撃と蹴撃。最速への一步を踏み出す久我に対して、後の先を先んじて相撃ちとした千冬。雲は弾け水面は波打つ激闘が幕をあけた。

「あいつ、嫌い・・・」

篠ノ之束がそう漏らした。そこにいるのは今は寝静まった織斑一夏と、疲れた顔をした織斑千冬だった。

「安心しろ、わたしもだ。」

結局、久我と千冬の勝負は久我のISのエネルギー切れで千冬が勝利した。その直後に篠ノ之束および桐生水守から通信が入ったのだ。

「初めまして、私は桐生水守。ここではてる直美の上司にあたります。一夏君はあなたより先に私の情報ネットと直美のRGSで最速に助け出していて、今はこの病院で眠っています。ああ、けがとかはありませんよ、念のためです。」

画面の後ろで寝ている一夏を見てひとまずの安心を得た千冬は、あまりの事態の落差に安堵というより落胆し盛大な溜息を一つついた。続けて束が発言する。

「そのいつくんは本物だよ、私が保証するよ。それと、ちーちゃんは大丈夫だった？あいつに何か変なことされてない？」

「やだなあ束さん、わたしたちがそんなことするはずないじゃないですか」

鉄板でも貫けそうな束からの視線を受けてなお飄々とする水守である。千冬・久我ペアが移動し戦っている間に、水守は束との対談を果たしていた。無論、画面越しであったがそれは水守にとって大変有意義なものだったらしく顔が綻んでいた。対して束は終始不機嫌であったが。

なおモンドグロツソ自体は決勝戦が開催されなかったので、優勝者無しという結果に終わった。

ここから数年後、IS産業においてさらにシェアを拡大したOOW社と織斑一夏は、亡国企業を巡る戦いにおいて本格的に関わりを深めていくことになる。

ISに乗れない女子の話（後書き）

桐生水守

OW社（one to one's works）のトップにして親会社である世界的大企業を持つ桐生財閥の次期社長（候補）。ちなみに社名はダブルオーダブルと読む、カッコ良さげな名前だからこうつけた。たいていゴツイ浮遊型車いすに乗っているが、実はこの車いすは電子制御の小型ファンネルつきの高性能である。また、彼女の肉体は彼女自身の研究の産物によって攻殻機動隊ばりの義体となっている。じつは脳味噌自体は元男であり、ISの登場を知ったとたんに義体化を行った。なお、遺伝子も薬品で後天的に変質させており、外部思考装置として人口ニューロンで作った人工脳も搭載している。

一夏の白式のデータを使うことで自分もISに乗れるようにしたいと考えている。

ISに乗れない、義体、大企業の令嬢とさらわれ安い立場にいるため、常に久我と一緒にいる。なお、このことで亡国企業には恨みを持っていて、いずれ排除しようたくらんでいる。二回目の単独行動の原因はこれ。

久我直美

モデルは言わずと知れたあの人、ストレイト・クーガー。ただし全然違う人になった。子供のころに見たスクライドのアニメのせいでスピード狂は加速した。口調は乱暴者って感じを意識している。

使用ISは”ラディカル・グッドスピード”であり、単一使用能力

は”アルター”。あらかじめ量子化してあつた装甲を自由に組み替えることができる。これでブースターを即席でくつつけてなんでも加速できるようにしている。ただのゴミを加速させて銃弾みたいにすることもできる。が、燃費が悪いので普段は脚と拳で頑張っている。

なお、原作と絡むのは亡国企業をメタメタするときのみである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3921y/>

黒歴史ノートより愛をこめて

2011年11月10日06時17分発行